

【修士論文要旨】

言語学習環境が留学後の言語維持に与える影響

マーティネリ・アダム*

語学留学プログラムは、その目標言語との接触、言語使用の機会、動機付け、環境の変化などにより言語学習や言語習得に多大な影響があることが知られている (Byram and Feng 2006, DeKeyser 2007, Freed 1995, Sasaki 2011, Wood 2007)。しかし、多くの先行研究はプログラム終了までが対象期間である。留学参加者が帰国した後に、再び元の環境に戻り、彼らの外国語能力がどのように変化するかについての研究はほとんど見当たらない。本稿の目的は、この留学前後の被験者の言語能力の向上だけでなく、帰国してからの数ヶ月後の言語学習と言語の低下・維持・向上の関係を明らかにすることである。

本稿の被験者は2019年の秋学期の8月から12月まで、約4カ月間アメリカのオハイオ大学への留学プログラムに参加した中部大学英米文学科の学生35名である。データ収集は3つの方法を採用し、3回に分けて行われた。第1回のデータ収集は留出発前の2019の7月末から8月の初旬に行った。第2回目は帰国直後の12月下旬から1月中旬にかけて行われた。最後に2020年5月の帰国後数ヶ月後にデータ収集が行われた。留学の直前、直後、そして再び元の環境に慣れたあとの3つのポイントでデータ収集し、そのデータによって、被験者の留学中の英語の向上と、帰国後の言語維持について比較したいと考えた。

本研究のデータ収集方法の一つは質問紙調査である。「英語学習プロファイル」(Freed et al. 2004)というアンケート調査を改良して使用した。英語学習プロファイルは一人一人の被験者が日常生活の中でどの程度、英語を勉強し、どの程度英語を使用したかについて確認するものである。被験者は主に同じ英語の授業を受けているため、アンケート調査では、主に授業外の英語学習と英語との接触を調査した。2つ目のデータ収集の方法は英語のスピーキングテストである。被験者の英語力と筆者の経験を踏まえ、スピーキングテストとして英検の2級のインタビュー用の問題を選択した。英検のスコアと録音された音声データを使用し、流暢さの基準として1分間の発話数(WPM)も計測した。3つ目のデータ収集は日本語でのインタビューで行った。これは、スピーキングテストの直後に行われ、TOIECスコアによって選ばれた上位5人、中位5人、下位5人に、英語の接触や勉強と動機づけについて調査した。合計で3回行ったが、新型コロナウイルスの影響によって第2と第3のスピーキングテストとインタビューはすべてZoomを使い、遠隔で行われた。

本稿では検討するリサーチセッションは以下の3つである。

*国際人間学研究科英語圏言語文化博士前期課程2年

1. 語学留学プログラムに参加すると、留学中だけではなく、帰国後でも英語力が上昇し続けるのか。
2. 留学後、英語力の喪失はどの程度起こるのか。
3. その原因はどこにあるか。

結果としては、留学前と留学後のスピーキングテスト、TOEIC スコア、そして流暢さのデータからは、予想通り多くの被験者が留学前と比較すると留学後に英語力が上がっていることが観察できた。スピーキングテストでは平均点が 16.6 点から 17.6 点に上がり、TOEIC では 453.0 点から 518.2 点に上がり、流暢さも 52.7wpm から 58.7wpm に上がった。しかし、第 3 のデータと比較すると、被験者は帰国し、再び元の環境で生活に戻るとスピーキングテストの平均は 17.3 に下がった。一見すると第 2 と第 3 のデータ間に被験者の英語力はそれほど変化していないように見えるが、個人レベルで 1 人 1 人のスコアの上下を見ると、第 2 と第 3 のデータの間に明らかな差がある。まず、第 1 と第 2 データを比較すると、34 人の中で 19 人のスピーキングテストスコアが上がり、6 人が下がり、9 人は変化ないことがわかった。しかし、第 2 と第 3 のデータでは、平均値では大きな変化が見られないが、34 人の中の 15 人のスコアが下がった。つまり、多くの被験者に留学後に英語力が低下したと言える。以下の図 1 は第 1 回目、第 2 回目、第 3 回目のスピーキングテストのスコアを表したものである。図 2a は第 1 のスピーキングテストと第 2 回目のスピーキングテストの個人スコア変化であり、図 2b は第 2 のスピーキングテストと第 3 回目のスピーキングテストの個人スコア変化である。

では、英語力の低下が見られなかった学生は、なぜ英語力を維持できたか、もしくはそのまま上達し続けることができたのか？ 英語学習プロファイルで得た英語接触に関するデータにはその答えへのヒントがあった。留学に行く前に被験者らは英語の 4 技能を含め、平均的に一日に 2.1

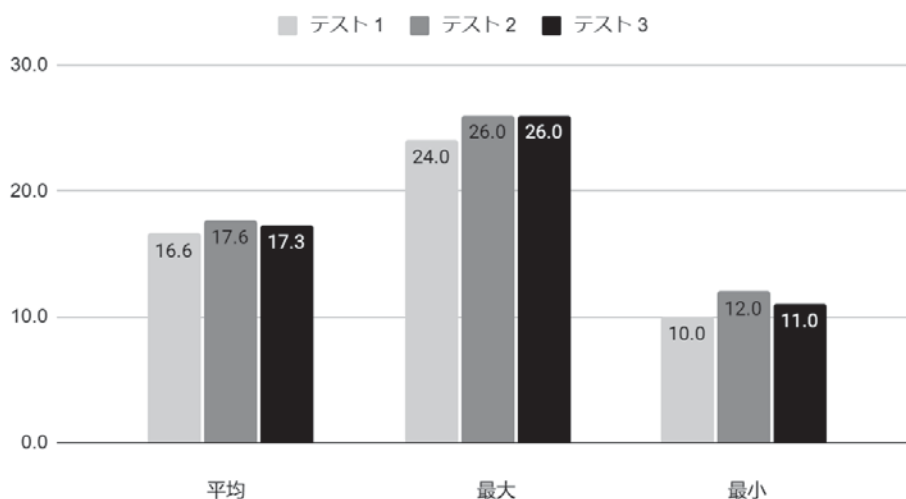


図 1 スピーキングテストスコア

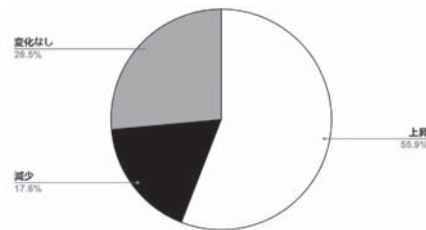


図 2a スコア変化 (1-2)

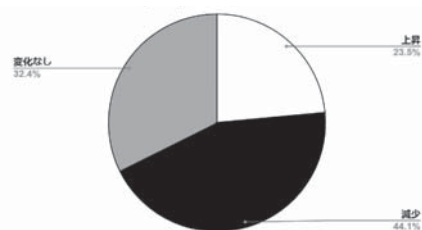


図 2b スコア変化 (2-3)

時間の英語との接触があった。その中でも多くの接触はリスニングとリーディングである。一週間にスピーキングは全くしなかったと答えた被験者も少なくない。留学中、スピーキング時間が、最小から最大になり、また、他の英語技能の英語の接触時間も上昇した。しかし、英語の総合接触時間とスピーキングテストの結果の相関係数を測ると、留学前と留学中でも相関係数は正数であるが、相関係数があるとは言えないほど低い数字(.17)である。したがって、留学プログラム中に、多く英語と接触する学生の英語力が、英語との接触が少ない学生より、英語力が上昇するという結果は得られなかった。それに対して、留学後の英語学習プロファイルの結果をみると、被験者は一日平均 2.9 時間、英語と接触していることがわかった。留学前の 2.1 時間から上昇しているが、留学中の 4.3 時間からは再び減少している。しかし、英語との接触量とスピーキング力の相関を取ると留学前と留学中との大きな違いが見られた。留学後の英語との接触はスピーキングテストとやや強い .49 の相関係数があった。留学前と留学中の 2 倍以上である。そのため、英語力を維持しさらに英語力を向上した被験者らは、元の環境に戻っても英語との接触を自らの意思で保ち続ける学生だということが言えるのではないだろうか。図 3 は第 3 回目のスピーキングテストと第 3 回目の英語学習プロファイルからの英語接触時間を比較し、その相関関係を表したものである。

インタビューを受けた 15 人の被験者の答えをまとめ、その結果の中ではいくつかの目立つ点が見られる。第一回のインタビューから第三回のインタビューまで被験者が主張する英語を勉強する動機づけが変更したということがわかった。第一回のインタビューで、多くの人は大雑把にアメリカの文化に興味があるや将来に英語を生かす仕事がしたいというように答えたが、その後、特に第二回のインタビューで、将来よりもアメリカで出会った友達と話すことや成績や試験の維持・向上が動機づけになっていたようだ。帰国後英語で SNS やチャットアプリなどによって英語との接触が多いということもアンケート調査と同じように見ることもできた。それにスピーキングテストのスコアがより高い人の方がこのような接触が多かった。「日本で英語を勉強することに限界を感じますか？」という質問に対して特に有意義な答えが出た。第三のインタビューで限界を感じるという被験者の中でそれでも上達した人は一人しかいなかった。したがって、感じないという被験者は上達した人が多く、英語喪失が見られた人が少ないことが明らかになった。図 4a と図 4b は第 3 回目のインタビューの「日本で英語を勉強することには限界を感じますか？」

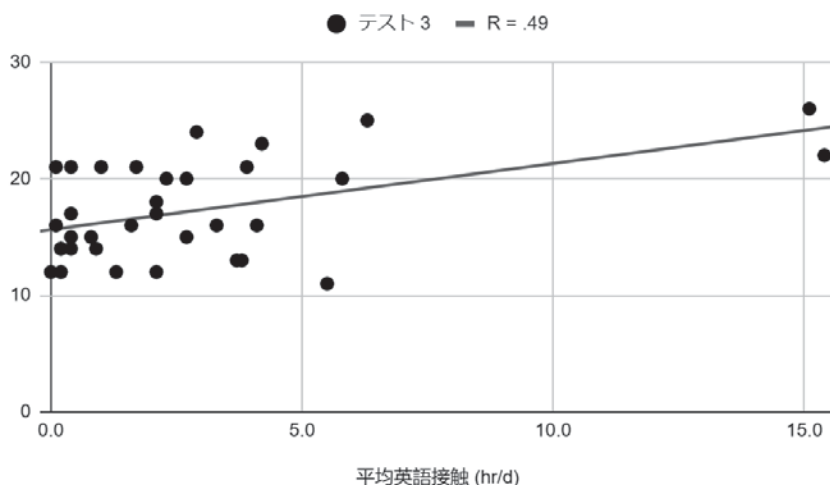


図3 テストスコア vs. 英語接触（第三回）

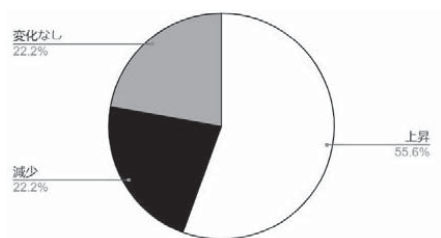


図4a 限界を感じない被験者

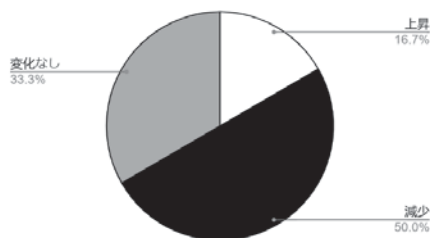


図4b 限界を感じる被験者

という質問に対しての答えと第3回目のスピーキングテストのスコアの関係を表したものである。

上記の一連の研究から本稿のリサーチクエッションに対する答えは以下のようになる。まず、語学留学プログラムに参加すると、留学中だけではなく、帰国後でも英語力が上昇し続けるのかという1つ目のリサーチクエッションに対しては、基本的にはNoであるが、個人差があることが分かった。2つ目の、留学後、英語力の喪失はどの程度起こるのか？という質問に対しては、かなり高いレベルでおこることが分かった。3つ目の、その原因は、インタビューなどから、主に環境による言語接触の不足とモチベーションの維持の難しさが挙げられた。要するに帰国後、特に意識的な言語接触や言語使用の場を設けなかった者は、留学中に上達した英語力が低下する可能性は高いが、母国にしながらモチベーションを一定レベルに保ち、授業や学校などで勉強するだけでなくインターネットとSNSを利用し、英語と接触を多く持ち続けた者は、留学後も「言語維持」ができると言えそうだ。

参考文献

- Byram, M., & Feng, A. (2006). *Living and studying abroad*. Clevedon [England]: Multilingual Matters Ltd.
- DeKeyser, R. (2007). Study abroad as foreign language practice. In R. DeKeyser (Author), *Practice in a Second Language: Perspectives from Applied Linguistics and Cognitive Psychology* (Cambridge Applied Linguistics, pp. 208–226). Cambridge: Cambridge University Press.
- Freed, B. (1995). *Second language acquisition in a study abroad context*. Amsterdam: J. Benjamins
- Freed, B., Dewey, D., Segalowitz, N., & Halter, R. (2004). The Language Contact Profile. *Studies in Second Language Acquisition*, 26(2), 349–356.
- Sasaki, Miyuki. (2011). Effects of Varying Lengths of Study-Abroad Experiences on Japanese EFL Students' L2 Writing Ability and Motivation: A Longitudinal Study. *TESOL Quarterly*. 45. 10.5054/tq.2011.240861.
- Wood, David. (2007). Mastering the English formula: Fluency development of Japanese learners in a study abroad context. *JALT Journal*. 29.